

こと、磨製石斧10点の中に定角式が3点あること、さらに、石鏃の中に有茎鏃があり、黒色のチャート製が目につくことなどが、中越遺跡の後期の石器の特徴としてあげられる。

第3節 中越式土器と中越期の細分

1. 中越遺跡出土土器研究の経過

現在、中部高地の前期初頭の土器型式として「中越式」が設定されているわけだが、中越遺跡出土土器についての考察は、ごく初期の調査で得た資料に基づくものしかない。以下にそれらをまとめておこう。

第1次から第4次までの調査で団長を務めた藤沢宗平氏は、第1次調査の概報の中で、出土した土器を、

①口縁部に有文帯をもち、胴部以下に文様を欠く尖底土器

②おせんべ土器といわれるもの

③関西系の爪形文の系統をもつと思われる薄手土器

④縄文施文の土器

にわけ、④はごく少量の関山式を含む神ノ木式であるとした上で、①と②が伴い、③と④が伴出するらしく、①は特に③④とは明確な時期差をもって区別されるのはほぼまちがいないとした〔藤沢1957〕。本書の分類に従えば、①はⅠ期Ⅰ群、②はⅢ群、③はⅢ群D、④はⅡ群とⅡ期Ⅰ群であり、Ⅰ期Ⅰ群にⅢ群が伴い、Ⅱ期Ⅰ群にⅢ群Dが伴うとし、2つの土器群を時期差をもってとらえ、しかもその中で、②と③が同群である可能性に気をくばるなど、わずかな資料の中から、基本的な伴出と前後関係をみごとにとらえている。ただ、第3・4次調査の後には、Ⅰ期とⅡ期の住居址が重なった場合の両址の遺物や、上層の豊富な包含層の遺物と住居址埋土の遺物を、いずれも区別し切れなかったため、さらには2号住の遺物出土状況が特異例と見えてしまったこともあってか、その概報では、第1次調査時の分析からは、やや後退してしまう。

中越式土器の名を初めて公にしたのは林茂樹氏であった。第1次調査の資料をもとに、住居址出土遺物を一括してとらえ、1号住出土土器をⅠ式、3・4号住出土土器をⅡ式、2号住出土土器をⅢ式と3期にわけ、Ⅰ式を早期末、Ⅱ、Ⅲ式を前期初頭に位置づけたのである〔林1965〕。中越Ⅱ式・Ⅲ式の中に東海系(1)の土器や神ノ木式を含めたわけで、それまで1号住出土の在地系の土器に対して一部で言われていた型式名を、より広範囲に用いたため、かえって混乱を招く結果となってしまった。

第4次調査の後、「中越式土器」とは、縄文前期初頭の天竜川上流域に特有な、胎土に繊維を含まない尖底土器、つまり藤沢のいう①として認識されるにいたるのだが、特異な形態から「中越式」の名のみが先行し、型式認識は、研究者の間でも一致するまでには至らなかった。中越遺跡出土の土器が総括的に整理されることなく、その全容も明らかでない状態の中では、無理からぬことであろう。

結局中越遺跡出土土器については、第1次調査時の大まかな2期区分をさらに深めることができず、Ⅰ期の土器の細分も、可能性はあるとしながらも具体的には示されてこなかった〔友野1983〕のが実情であったのである。

2. 阿久遺跡出土のいわゆる「中越式土器」

昭和49、50年の諏訪市千鹿頭社、十二ノ后遺跡につづき、昭和51年から53年にかけて原村阿久遺跡が、いずれも長野県中央道遺跡調査団によって調査され、大規模な前期初頭の集落址と共に、特に後者で在地系土器（Ⅰ群土器）の良好な資料を得た。報告ではその中のⅡ期Ⅰ群Aを「いわゆる『中越式』と呼称されてきた土器である」とした上で、Ⅰ群Aは、オセンベ土器（細線文指痕薄手式土器）の影響下に生まれた土器、あるいはその系譜につながるものであり、下限は神ノ木式直前とすることができ、関東編年に対応させるならば、花積下層式土器に後続し、関山式後半期の一部にまでくいこむものと考え、器形は頸部がくびれ底部が乳頭状あるいは尖底のものから、直線的に底部へ至り丸底に近い尖底になるものへと変化し、文様は密から粗への簡略化の変遷過程がたどれるとした〔佐藤1982〕。さらに中越遺跡の資料との比較の中で、中越遺跡にはより古い段階のものがある可能性が強く、阿久遺跡のⅠ群Aは中越系列の最終段階に位置づけられるとしており、これによって、中越式土器の後半期の様相が明らかにされたのである。このⅠ群Aは、本書でいうⅠ期Ⅰ群C・D・Eであり、より古い段階のものとは、同A・Bにほかならない。また同書では、いわゆるを付したりカッコでくくるなどの形で表現しており、「中越式」が土器型式とするにはまだ、不完全であるとの考えも暗に示している。

3. 中越式土器

このように、阿久遺跡の前期初頭の在地系土器は、中越式の新しい時期に位置づけられたわけだが、中越遺跡の報告書が未刊の状態が続き、その典型とされていた中越遺跡1号住の土器がⅠ群Cであったことも手伝って、阿久遺跡の土器を代表側として中越式は理解されるようになる。その結果、現在では、後半期に特に表われた、施文を含めて造りが簡素である点と、地域的独自性の強さが、中越式土器の特徴として強調されすぎようになってしまったきらいもある。そこで、あらためて中越遺跡出土土器によって中越式土器を示しておきたい。

中越式土器の性格は、すでに確立しているとしていいだろう。すなわち、縄文前期初頭の天竜川上流域から諏訪地方の、在地系として主体をなす土器であり、繊維を含まない点で西回りで、形態には早期までの特徴である尖底を残す。とすれば、中越遺跡の中越式土器は、Ⅰ期Ⅰ群A～Eとなる。その形態はA→B→C→D→Eと連続的に変化し、Fを経てⅠ群土器は神ノ木式へと移行するのである。

中越式の初源期の土器は、形態上の際立った類似性から、東海地方で在地系の系譜の中からは生まれ得ないとされた清水ノ上Ⅰ式や、南関東に突如表われた異質な土器といえる菊名貝塚XⅢ類（胎土に繊維を含まない細線文土器）などと系譜を同じくするとしていいだろう。Ⅲ群の量からみて、中越遺跡にあっては天竜川下流域からの強い影響が恒常的にあったことはまちがいないが、下伊那郡豊丘村の田村原遺跡では、中越遺跡でのⅢ群が主体を占めており、Ⅲ群即東海地方と単純に結びつけ、東海系の土器の影響下に中越式土器が成立したとするのはやや早計と思われる。両者に共通した祖形があった可能性も考えねばならないだろう。位置的にはそれらの土器の分布域の北端にあたる。中越式期後半にみられる文様構成の縦位の変化は、他の土器には見られない現象であり、その時、中越式土器はその独自性を極めて強く持つにいたったと言える。茅野市高風呂遺跡と原村阿久遺跡をみると、中越式土器が諏訪地方の在地系土器の主体となるのはその後半期であり、それも単なる土器の変化では説明できないほど大規模かつ急速に移行したものと見られる。

4. 中越期の再区分

以上、中越遺跡の縄文前期の遺構と遺物を中心として、その変遷過程を含めて検討してきた。そして、それらを総合して見ると、I期のうちに、1つの大きな転期があったことが見てとれるのである。そこに見られる現象として

- ①住居が、浅く掘られた方形や不整円形で柱穴、炉ともはっきりしないもの（A）から、深く掘られた円味をもった隅丸方形の4本柱で周溝と地床炉をもつもの（B）にかわる。
- ②在地系の土器の文様構成が、横位（A）から縦位（C）にかわる。
- ③道具としての土器、石器の量が増加すると共に、住居の廃絶後の凹地のうちの特定のものが土器廃棄の場として選ばれるようになる。
- ④南の駒ヶ原台地縁辺にも散在的にあった住居が、中越の地へ集中し、規模の大きい集落を形成しはじめる。

などがあげられ、これらは、中越式文化が、この時を界に、それまでの少量の道具とキャンプサイト的な住居しかもたなかった、天竜川下流域からの波及期の状態から脱却し、強い独自性を確立して定住性を強め、大集落を形成し、以後、諏訪地方へも進出するといった、大きな繁栄期をむかえたことを示している。

さらにII期は、いうまでもなく、在地系の土器が縄文を地文とする平底の土器へとかわっていることから、中越の地が西日本文化圏から東日本の文化圏へと組みこまれた時期として、I期と一線を画されているわけで、中越遺跡の縄文前期は、I期前半、I期後半、II期の3期に再区分することが可能となる。主体となる土器はI期I群A、I期I群D・E、II期I群A・Cが、住居址形態はA、B、Cがそれぞれ対応し、集落は散村から集村へと急速に形をかえ、定住性を強めるのである。

註1 林氏が分類の前提とした土器の出土地点と、現有する遺物に施されている注記には、一致しない部分が多い。くりかえすが、本書では、遺物の出土地点は注記に従った。